

【原著論文】

国民祝祭としてのドイツ・オリンピア
—セダン祝祭から1922年ドイツ競技大会開催に至る経緯—

波多腰克晃

体育原理研究室

German Olympia as national festival

—Developments from the Sedan Festival to the 1922 German Games—

Katsuaki HATAKOSHI

Abstract: This study considers how the German Olympia was linked to the German Games. Above all, this topic was examined as a battle for supremacy between Turnen advocates and promoters of sports. Up until now, research regarding the struggle between Turnen and sports has been approached as a controversy over two alternatives. However, this research focuses on the process leading up to the holding of the German Games as a national festival, and clarifies the complex process of “resistance” and “amalgamation” of the inherently German traditional culture of Turnen within the process of acceptance of sports in Germany. The result revealed that this process had its inception in the inclusion of Turnen performances, sports, and games in the program of the Sedan Festival, which is a festival commemorating the German army’s victory in the Franco-German War, that there were plans to hold the national Sedan Festival as the German Olympia, which was to be a national festival, but these plans ended in failure, and that finally the German Olympia was held in Germany on a national scale via the German Games.

(Received: December 20, 2008 Accepted: February 5, 2009)

Key words: DT, ZA, Gebhard

キーワード：ドイツトゥルネン連盟, ドイツ民族・青少年遊戯促進中央委員会, ゲプハルト

1. はじめに

近代の扉は18世紀後半の産業革命と市民革命によって叩かれたが、いち早く近代の扉を開き、その恩恵に浴したのがイギリスとフランスであった。300以上の諸邦に分裂し、イギリス、フランスの近代化に遅れをとったドイツでは、ナポレオン軍のドイツ支配によって、ようやく王権からの解放が果たされる。かくしてドイツの近代化は、「祖国の統一」と「ナポレオン軍からの解放」という2つの大きな課題を抱えることになったのである。

そうした歴史的背景のもとに「トゥルネン (Turnen)」が登場してくる。ヤーンに先立ってドイツ国内で体操運動を展開したグーツ・ムーツは、体操を「ギムナスティーク」と名づけた。しかし「祖国の統一」と「ナポレオン軍からの解放」という課題を背負っ

ていたヤーンは外来語である「ギムナスティーク」を捨て、ドイツ固有の言葉「トゥルネン」を選択したのである。ヤーンによれば「トゥルナー」は「兵」を意味し、人々に中世の「馬上槍試合 (Turnier)」を想起させるものであった¹⁾。

言葉の選択からも窺えるように、ヤーンは「ドイツ固有の文化」として「トゥルネン」を考案したのであり、ヤーンがトゥルネンに刻印した「ドイツの固有性」はその後も多様な変容を遂げながら受け継がれていき、ドイツでのスポーツ受容に大きな影響を与える。

このようなトゥルネンの歴史的展開については多くの研究がなされており、単なる身体運動の事象としてだけではなく、近代ドイツにおけるナショナリズムの高揚に重要な役割を担っていたことが多くの研究者によって論じられている²⁾。本稿が考察の対象とする国民

祝祭としてのドイツ・オリンピアとトゥルネンに関する研究についても K・レンナーツ (K. Lennartz) や M・クリューガー (M. Krüger) をはじめ多くの研究者が言及しており、そこでは、ドイツ固有の文化であるトゥルネンからスポーツ化への過程として解明されている。しかし、イギリスに誕生した近代スポーツは、グットマン³⁾が「文化ヘゲモニー」と呼ぶように、いくつかの抵抗を受けながらも、イギリスの帝国主義とともに世界中に普及し、各国の近代化とともに受容されている。ドイツの場合、近代スポーツの受容期にはドイツ固有の文化であるトゥルネンが強力な「対抗文化」として存在していた、ということ踏まえるならば、トゥルネンからスポーツ化への過程においてトゥルネン擁護派とスポーツ推進派との覇権争いを見逃すことはできないのである。ドイツ固有の文化であるトゥルネンとイギリスから伝播した外来文化であるスポーツとのそれぞれの覇権争いはスポーツ史上「トゥルネン＝スポーツ抗争」と呼ばれているわけであるが、これらの研究もまた近年多くの研究者によって解明されている⁴⁾。しかし、これらの諸研究は国民祝祭としてのドイツ・オリンピア開催に至る経緯とトゥルネンの「抵抗」、「融合」とを関連させた説明は充分なされていない。1922年にベルリンにおいて開催された第1回ドイツ競技大会はトゥルネン側とスポーツ側とののはじめての全国統一の競技大会として、また第二帝政初期からの念願であった国民祝祭としてのドイツ・オリンピアとしてはじめて開催された競技大会であった。したがって、国民祝祭としてのドイツ・オリンピアの開催に至る経緯をトゥルネンの「抵抗」、「融合」の過程としてとらえる視点は「ドイツに如何にしてスポーツが根付いたのか」という問いの一端を明らかにする重要な位置づけとなる。

そこで本稿では、国民祝祭としてのドイツ・オリンピア、すなわち、第1回ドイツ競技大会開催に至る経緯を「トゥルネン＝スポーツ抗争」という視点を軸に考察する。

2. セダン戦勝記念祝祭における遊戯、スポーツ祭

1922年ドイツ国内競技大会の根源はドイツ第二帝政初期に始まる。普仏戦争⁵⁾時にドイツがフランス領のセダンでフランスに勝利したことを記念する毎年恒例のセダン祝祭は、ドイツ第二帝政が自らの栄光をたたえるために創り出した最初の国民祝祭であった。その最も有力な推進者であったボーデルシュヴィンクは、ドイツの民衆に対して平和な時代の頹廃を防ぐために戦時の規律と同様に日常生活における規律を強調した⁶⁾。なぜなら、当時ナポレオン三世治下のフランスで「たらふく飲みくいし、朝から晩まで踊り狂い跳ね

まわっている」⁷⁾祝祭を目撃したボーデルシュヴィンクは、そのような運命からドイツを救い出されねばならないと考えていたからである。そこで、民衆がより実りある余暇を過ごす方法としてセダン戦勝祝典に着手した。セダン祝祭とは朝の礼拝式で始まり、夕方の祈禱式で終わらなければならないとされた⁸⁾。しかし、ボーデルシュヴィンクが思い描いたような重々しく質素な行事はしだいに薄れ、お茶をしたり木登りや袋とび競走などの楽しみ、午後には屋台にある射撃をしたり夜には酒宴や踊りを楽しみ、そして最後に花火が打ち上げられ祝祭を彩っていった⁹⁾。とは言え、厳格かつ愛国的な演説ならびに学校やクラブ内におけるトゥルネンの模範演技、スポーツ競技大会もまた発生したのであった。このような経緯のもとセダン祭は総じてそこで行われたドイツの遊戯やスポーツ祭の根源となっていたわけであるが、とりわけ、ブラオンシュヴァイク地方における祝祭は他の地域のセダン祝祭のモデルとなった¹⁰⁾。1882年、ヘルマン¹¹⁾は「全国国民祝祭」を構想し、セダン祝祭は4年もしくは5年毎に全ドイツ国民から寄せ集め皇帝の宮廷において開催されるべきであるとした¹²⁾。また、ヴィッテもブラオンシュヴァイクのセダン祝祭を参考に各地で祝祭を催すべきであると提案している。しかしそれは普仏戦争におけるフランスの敗戦に対して歓喜するものではなく、ドイツ帝国創設を想起させるためである¹³⁾、とされた。そうした考えに基づいて、彼はパリのソルボンヌで開催されたクーベルタン主導によるパリ会議について以下のように言及している。

「パリのソルボンヌでの宴会場において1894年夏に古代オリンピック競技大会の復興に関する国際会議に招聘され、かつてのオリンピアのような周期的な祝祭の開催を導入することを決議した。(中略:引用者)国際オリンピアはばかげたことであるが、もし我々が国内オリンピアを祝祭することができたならば、本当の意味での古代の戦いのアルフェイオス伝説に遭遇するであろう。」¹⁴⁾

1895年初年ドイツ民族・青少年遊戯促進中央委員会 (Der Zentralausschuß zur Förderung der Volks- und Jugendspiele in Deutschland 以下 ZA と表記)¹⁵⁾はヴィッテの理念とセダン祝祭を対比させ、各地域のセダン祝祭が最高潮に達するように4年もしくは5年毎に全ドイツ「国内オリンピア」を開催し、また芸術家による演出や文化的な活動を上演し、クーベルタンがパリで設立した国際的な「オリンピア」よりも、よりギリシア的な理念の維持をしようとした。

3.1. 国内オリンピック競技大会なのか 国際オリンピック競技大会なのか

ZAの初代会長であるシェンケンドルフは、1895年6月にヴィッテの理念を称賛しながらも、その数週間前に1896年の春にアテネにおいて開催される第1回国際オリンピック競技大会にドイツが参加するようにフォン・ディミトリオス・ヴィケラスから依頼されていた。そもそも、ZAの首脳部であるシュミット¹⁶⁾もまた以前からヴィッテの「国内オリンピック」の開催案を徹底的に学び、是認していたが、その一方で完全に国際オリンピック競技大会を否定していたわけではなかった。それらをもとに、いかなる立場をもって国際オリンピック競技大会に参加するのかというZA側のギリシア組織委員会へ回答するための意見書を構想した¹⁷⁾。しかし、パリのジル・ブラス紙に掲載されたクーベルタンのインタビュー¹⁸⁾がドイツ日刊紙に掲載され、ドイツ国民の激しい批判が増し、非常に保守的なドイツトゥルネン連盟(Deutsche Turnerschaft以下DTと表記)の理事でもあるシュミットは1895年秋にZAに激しく忠告して国際オリンピック競技大会への参加を思いとどまらせた。シュミットはただちに「ドイツ国内オリンピック競技大会」のプログラムを公表した¹⁹⁾。また、1895年秋にベルリンに結成されたドイツスポーツ・遊戯・トゥルネン連盟に深く関与していたゲプハルトは、再度国際オリンピックへの参加を試みたが²⁰⁾、10月10日の委員会ではドイツ国内オリンピックの新提言がなされ先送りとなり、続く26日の会議において最終的に否決された²¹⁾。それゆえ、ゲプハルトは「ドイツ1896年アテネ・オリンピック競技大会参加委員会」を結成。1895年12月13日に第1回会議を開催し、ドイツのアテネ・オリンピック競技大会参加を望んだ。貴族階級の人々とともに引き続き活動するために、1896年1月16日、ドイツ1896年アテネ・オリンピック競技大会参加委員会を再び招集した²²⁾。また、この委員会の第3回会議にはアテネ・オリンピック競技大会参加に対して反対を表明していたZAの会長であるシェンケンドルフも参加していた²³⁾。とはいえ、シェンケンドルフは3日後にベルリンにおいてDTの会長であるゲッツと会合し、「愛国大連合」としてゲッツとともにゲプハルトに対抗してイニシアティブをとり、1900年にライプツィヒでドイツ国内オリンピック競技大会を開催すべきであると決めた²⁴⁾。それでもなお、ゲプハルトはこれに対して屈することなく、アテネへ向けて、指導的であり代表的なZAとDTが国際オリンピック競技大会に参加するために努力した。ゲプハルトは何度も仲介に入りクーベルタンへの誹謗・中傷に対して擁護し、トゥルナーとスポーツ愛好家と

の妥協案を提示した。ゲプハルトにとってその提案とは、ドイツ国内オリンピックと国際オリンピックの開催の二者択一を意味していたのではなく、ゲプハルトは両組織に国内オリンピックの準備に協力してもらえるよう要請した。

「全ドイツ的な国内競技大会の開催を国際競技大会と対立させて前者の人気を煽るために後者が犠牲となるようなやり方は残念に思う。つまり、それは両方の計画を一緒に成功させようということである。」²⁵⁾

3.2. 国内オリンピック競技大会へ向けての イニシアティブ

国際オリンピック競技大会を拒否するDT側と積極的に参加を望むゲプハルトという対立構造が存在しているが、ここで注目に値するのは、両組織とかがわりを持っていたZAの存在である。

DTの幹部は共同の開催から手を引き、国民祝祭を提案、またセダン祝祭のように分散して個々の場所でトゥルネンが開催されるべきとした。しかし、ZAの要求は、セダン祝祭の共同のドイツ国内オリンピックとしての開催であり、DTが提案している分散して個々の場所で開催する意見に対しては難色を示していた。1896年10月の時点で国内オリンピック計画を支援することに対してDTの会議では過半数には至らなかった²⁶⁾。シェンケンドルフはそれゆえに断固として自らのやり方を固持しているトゥルナーから離れ、彼独自にドイツ国内オリンピックを計画していった²⁷⁾。

シェンケンドルフは1879年1月、全ドイツ共同の国民祝祭開催の覚書を提示した後、同月にはプロイセン州議会議員を伴った愛国同盟と全ドイツ連盟という新しい力を集め、ドイツ国民祝祭帝国委員会(Reichsausschuß für deutsche Nationalfeste以下RAと表記)を設立した。身体運動は芸術、音楽、演劇とともに競技大会が開催されるべきであるとされた。それには有名な建築家によるすばらしい計画が必要であり、その計画とは1900年にキフホイザー記念碑において1,000m以上の巨大な競技場と300,000から400,000の観客席を計画し、完全なる古代の円形劇場を建設することであった²⁸⁾。祝祭場は最終的に1898年3月にライン川沿いのリュエデスハイムにあるニーダーヴァルト記念碑に決定された。しかしながら、経済的な障害を克服できずに破綻する。1898年12月4日のRA会議において計画の実現が当面は不可能であることが確認され、計画は失敗に終わった²⁹⁾。

しかしながら、RAの指導部の理念を挫折するこ

とはなかった。すなわち、1899年1月にはすでに、祖国の祝祭競技のための帝国協会（Reichsverein für Vaterländische Festspiele 以下RVと表記）を設立させたからである。それによって祖国の祝祭競技としての地方のセダン祭が強力に推進され、広がっていった。

このような国民祝祭としての競技大会の開催にDTも無視していたわけではなかった。それどころか、以前にヴィッテが提案した理念を容認した。そして、RVは1899年1月にDTとともに、各地で催されている祝祭を進展させるために計画的に国民祝祭を実現させた。たとえば、RAの理事兼RVの委員であり、後に熱狂的な国民祝祭のファンとなったロルフスは次のように書き記している。

「それは国民祝祭という神聖なものになるべきである。10年後のみならず、100年とつづき、1900年のみではなく、1904年、1908年、1948年、1996年まで生じるものである。」³⁰⁾

以上のような活動は主に1900年ブラオンシュヴァイクのセダン祝祭25周年記念祭において見て取れる。その後、ケルンやドレスデンにおいてもRVが構想した祝祭が各地で行われたが、全ドイツ規模の国民祝祭としての国内オリンピックの開催は第一次世界大戦を経た1922年を待たなければならなかった³¹⁾。

3.3. ゲプハルトによる統一の試み

国際的なオリンピック競技大会をベルリンで開催する経緯に関してゲプハルトの努力を無視することはできない。1901年にはすでに、ゲプハルトはIOCにおいて1908年ベルリン大会開催案を打ち出した。しかしながら、1904年6月のロンドン会議まで延期された。RVの協議ではライプツィヒとフランクフルトを候補地に挙げられたが失敗に終わった。なぜなら、RVの考え方はとりわけ田舎にあって、魅力あふれる、大多数であり、それぞれの土地の風習を持った「ナショナル」な意味を付した祝祭場を支持していたからである。国際オリンピック競技大会開催の理想的な競技場もしくは、祝祭場建設のための明確な計画なしで成功を取めることなく、ベルリンを国際オリンピック競技大会の開催地として打ち出すには絶望的であった。ゲプハルトはそれゆえに1903年秋からシェンケンドルフによる「セントルイス・オリンピックへのドイツ参加に関する委員会」で支持を得ることを試みた。そのさいにゲプハルトは2つのことを提案した。1つめは祝祭プログラムの草案の中に青少年スポーツおよび学校スポーツにおける衛生学や教育学の講演がなされるべきであるとした。ドイツにおける一流の専門家の多くが

ZAに所属しているため貢献できるとしたからである。2つめにはゲプハルトはドイツ国内オリンピックにとってふさわしい祝祭場としてヴィルヘルム二世が広大な敷地の国民公園を寄贈したいと望んでいるベルリンのグリューネヴァルトを獲得できる可能性を示唆した。たしかにシェンケンドルフは自らゲプハルトの委員会に協力することについて言明しなかったが、そのことをZAの理事の委員の自由裁量に任せた。それによって、シュミットとコッホと並んでRVの役員でもあるライトもセントルイス大会参加のための準備委員会に加わった。

1904年1月と2月にゲプハルトはすでにシェンケンドルフに対して報告した提案についてRVの代表と話し合いをした。そこで得られたのは、1908年に通達される国際オリンピック競技大会の開催地に役立てることができるベルリン国内オリンピック祝祭地計画というゲプハルトにとって非常に関心のある結果であった。ゲプハルトはRVのリーダー的存在の代表者から支援を得て、さらに2月にはドイツ・オリンピック競技大会セントルイス大会委員会（Deutsches Komitee für die Olympischen Spiele in St. Louis）を解散させ、オリンピック競技大会のためのドイツ帝国委員会（Deutscher Reichsausschuß für Olympische Spiele 以下DRAfOSと表記）を設立するための申請を2月に打ち立てた。1904年3月25日にRVの理事は新しい委員会との合併に賛成した。

以前から指導的立場にいるRVのライトとゲプハルトの両者はこの設立した委員会において共通の考えを示した。それは新たに設立されたDRAfOSの規約を仕上げることであった³²⁾。そのはじめの条項は：

「ベルリンを本拠地としていたこのオリンピック競技大会帝国委員会はドイツ帝国における国内オリンピックを開催するという課題を持っており、それはまた、国際競技大会にドイツが参加するための準備となる。」³³⁾

RVのライトとその他の委員にとってDRAfOSの設立は、ベルリンに全ドイツの国民祝祭地の中心地という「国内オリンピックの再興」とそれに伴って1897年と1898年にわたって育て上げてきたドイツ国民祝祭のための委員会の再建を密かにイメージしていたのであった。

4. DTの役割

DTは1900年以前にドイツ国内オリンピックに対する態度と同様に国際オリンピック競技大会への参加を拒絶したので、DRAfOSとは分断したままであった。1905

年北アメリカ体操同盟への体操チームの派遣とヨーロッパにある隣国の姉妹連盟とのいくつかの大会の参加の後、DTも次第にオリンピック運動に視野を広げるようになった。最終的にDTはDRAfOSに歩みより、1907年ルールはDTの公式の代表者をDRAfOSに派遣した。それに伴って、すべての以前からの反対者と抵抗勢力はひとつにまとまった。国際オリンピック競技大会の開催のみならず、国内オリンピック競技大会も目論むDRAfOSの規則はZAの代表者らと同様DTの代表者にとっても歩み寄りのおおきな契機となった。ただし、必ずしもDTが好んで歩み寄ったとは言い難い。つまり、何よりもまず重要なことは如何にしてDRAfOSへ加入したのかという点であろう。ガッシュは次のように述べている。

「ドイツのトゥルナーはまるでビジネスマンのようである。居心地の悪い展覧会に代表者を送らなければならず、われわれはオリンピック競技大会を行うことにビジネスマンのように良い表情をしなければならぬし、しかもわれわれの事柄を利用する。」³⁴⁾

この「居心地の悪い展覧会」とは1908年第4回ロンドン・オリンピック競技大会のことであり、その前夜祭に参加すべきかどうか、トゥルナーは議論した。彼らはいまだ対立状態にあった。たしかに、一方ではDRAfOSの会員としてよい1年であった。なぜなら、DTの歩み寄りによって国際オリンピック競技大会に参加の意思を表すことができたからである。また他方では同年、同日程にフランクフルトにおいて第11回ドイツ体操祭を重複して開催した。どちらの大会に選手を派遣させるのかという議論がしばらく続いたが、結局2つのチームを構成させた。ガッシュはこの決定にたいして次のようにコメントしている。

「彼らがドイツのトゥルネンを外国において名誉をもたらすであろうが、このドイツで開催するフランクフルト・オリンピアではすでに何度も披露された演技であり、それがようやく表明されることになった。そして自由演技体操はもっともすばらしいトゥルナーによって披露される。」³⁵⁾

ガッシュやその他のトゥルネン指導者にとってフランクフルト体操祭はドイツ国内オリンピアそのものであった。それはまぎれもなく愛国主義的に開催され、「閉会式にはその美しさと純然たる偉大さをもったニーダーヴァルトの地であれば模範となる古代ギリシアにも勝るとも劣らないであろう」というガッシュの発言から窺える³⁶⁾。それによって閉会式に関してトゥ

ルナーはRAよりも前から1900年ドイツ国内オリンピアの祝祭地としてニーダーヴァルトを選定していた。つまり、古代オリンピアを意識し、祝祭の要素としてギリシア的な要素とゲルマンの女神や英雄を参照し、ドイツ体操祭という名の祝祭を開催していたDTにとっては新しい祝祭を創り出す必要はないと主張していたのである。また、ガッシュが示したように国際オリンピック競技大会というような、「オリンピア」と名のつく祝祭は多数存在していたことから裏付けられるというのである³⁷⁾。オリンピック発祥の地であるアテネにおいて1906年にオリンピック競技記念大会が開催されており、また、DRAfOSもドイツ・オリンピアを計画し、その開催場所として1908年グリューネヴァルトに競技場建設を予定していた。そうした意味では異なる開催という不愉快な競技大会においてDTは独自の体操祭を正当に見ていた。しなしながら、フランクフルト体操祭にドイツ国内オリンピアの長所を取り入れなかったわけではない。その意味するところは、1907年以降トゥルナーがドイツ国内オリンピアに対して以前よりも抵抗しなくなったということである。そして、DTをして第4回ロンドン大会に参加せしめるに至る。しかしながら、そうした歩み寄りが国内において見受けられていたにもかかわらず、この大会への参加によって再びDT指導部の反オリンピック感情を引き起こすことになった。ドイツのトゥルナーが自らをアピールする舞台であったはずのドイツ選手による集団演技は、オリンピック公式代表者たちの招待夕食会の時間と重なっており観客が少なかった。ゲッツはこれをイギリス側によるドイツ軽視として非難し、1912年第5回ストックホルム・オリンピック競技大会に選手団を送らなかった。しかしながら、1916年第6回ベルリン・オリンピック競技大会開催のさいには再び譲歩する動きによって実現することになった。DTの会長であるゲッツは1913年2月23日にドイツ競技大会連盟(Deutscher Kampfspielbund 以下DKBと表記)の創設集會に出席し、DTはこの組織の会員となった。この連盟の会長であるロルフスはトゥルナーの支持やドイツ帝国創設50周年にさいして1920年に予定しているドイツ競技大会(Deutsche Kampfspiele)を導入しようと努めた。DTはこの攻撃的で民族主義的な競技大会連盟に代表を派遣し、そのわずか1ヶ月後には臨時会議において1916年のベルリン国際オリンピック競技大会参加に対して再び可決するに至った。

5. 地方のスポーツ競技大会としての 国内オリンピック競技大会

DRAfOS創設後(1904)とDTの加盟(1907)は「オ

リンピア」の概念を非ドイツ的な外国語と看做さず、たとえば、第11回フランクフルトの体操祭の際にはトゥルナーは「フランクフルト・オリンピック」と言っていた³⁸⁾。1909年から1913年までの間に陸上競技もしくはトゥルナー的で民族的なプログラムをともなったあらゆる競技大会の開催、すなわち「オリンピック」はいくつかのスポーツ的な遊戯（芝の上のスポーツ Rasensport）を取り得ることができた。DRAfOSの元会長であるアッセブルグ伯爵が亡くなる数カ月前に1909年ベルリンにおいて記念すべき第1回ドイツ・オリンピックが開催された³⁹⁾。また、大学の青少年からは身体運動のためのドイツ大学同盟（Deutsch-Akademischer Bund）に所属しているアカデミック体操連盟（Akademischer Turnbund）とアカデミックスポーツ連盟（Akademischer Sportbund）を組織し、アカデミック・オリンピックという名称を掲げ、大学体操・遊戯・スポーツ祭を開催した。第1回のこうした方法による開催は100年祭のさいに1909年にライプツィヒ大学において祝祭が行われ、1910年にはベルリン大学創設100周年に2回目が開催された⁴⁰⁾。1911年にはブレスラウ大学の100年記念祭の機会に3回目のアカデミック・オリンピックが導入された。さらに、アカデミックスポーツ連盟はそのオリンピックを連盟の祝祭としてドレスデンで行われた国際衛生展覧会と関連づけて同年に祝祭を催した。また、DRAfOSは第2回ドイツ・オリンピックを同じ時、同じ場所に計画した。第3回ドイツアカデミック・オリンピックの開催がドレスデンに導入されるとエルベ市の単科大学やそのほかの学生組織が引き続きアカデミック・オリンピックを支援した。

ライプツィヒの諸国民戦争記念碑のすばらしい落成式のさいには、1913年第4回ドイツアカデミック・オリンピックが行われた⁴¹⁾。以上のように1910年以降は学生協会やDRAfOSのトゥルナー祭、スポーツ祭はそれぞれ自主的にオリンピック祭として定着させていった。ドイツ陸上競技連盟（Deutsche Sportbehörde für Athletik）とそこに所属する団体はその他の芝生の上のスポーツである陸上競技大会や同様の競技大会を「オリンピック競技大会」として公示することに貢献した。マグデブルグ、デュッセルドルフ、フルダなどといった大きな都市には「オリンピック競技大会の開催」はわずかしかなかった。1912年夏の終わり頃に第6回ベルリン・オリンピック競技大会が最終的に決定してはじめて、DRAfOSは「オリンピック競技大会」という概念を地方のスポーツ祭の名称と結びつけた。また、ドイツ陸上競技連盟は傘下の団体会員にこの概念を織り込むように要請した⁴²⁾。「オリンピック競技大会」という概念は1916年ベルリン大会開催のために言語表現上、計画的に広められた名称であった。

6. ドイツ競技場の建設

ドイツ国内オリンピックの広い祝祭場の建設という理念はすでに1900年以前からRAによって追求されていたが、すべての計画は資金調達という点で失敗に終わった⁴³⁾。また、1908年ベルリンでオリンピック競技大会を開催するためのセントルイス大会の前哨戦において、競技場建設を現実のものにするというゲブハルトの試みもまた実現することができなかった。

1908年12月30日、DRAfOSの会長であるアッセブルグ伯爵は建設の説明、費用の見積もりとともに「ドイツ競技場建設の参加への呼びかけ」に署名した。そしてDRAfOSの会議のさいに帝国のすべての大きな都市におけるトゥルナーとスポーツの代表者に説明した。このプロジェクトの資金調達を現実なものにするために地方自治体の行政と議員に話を持ちかけた。その文書はドイツ国内オリンピックと国際オリンピック競技大会をともなった理念とを結合させるやり方として具体的に示されている。ほんの1節ではあるが、いわば国際オリンピック競技大会をドイツで開催するための競技場建設の必要性について言及している。

「我々は、1912年ドイツに次の国際競技を開催できるかどうかというRAの質問に対して、RAがドイツ競技場を作り上げるといふ確信をもっているならば、開催できるということをこの機会に言及し得る。」⁴⁴⁾

この競技場建設に関する決定的な論拠はしかしながらドイツ国内オリンピックを成し遂げるといふ文脈に立脚している。

「我々はドイツ・オリンピックを成し遂げることをはっきりと主張する。大きな国立競技場が本当に必要なのである。威厳ある懸隔な場所において我々すべての民族の競技大会であると同様に州に属する個々の地区の特別な競技大会ならびに独自に仲間同士が結束したグループのために開催されるべきである」⁴⁵⁾

この呼びかけに対する反響は内的分裂をはらんでいた。いずれにせよ、この計画は失敗した。そしてDRAfOSは1912年のオリンピック競技大会の立候補地として備えることができなかった。しかし、そうした状況においても、1912年ポドビエルスキー⁴⁶⁾はみずからのイニシアティブのもと再び届け出最終期限を直前に誘致に乗り出し、そして最終的に1916年ベルリン・オリンピック競技大会が選ばれた。その後10カ月のうちに競技場は建設された。

ライプツィヒ諸国民戦争記念碑の100周年記念とヴィルヘルム二世王位25周年記念では1913年6月の開会式の枠外で展開した。トゥルナーのみで10,000人、サッカー選手4,000人が参加し、10,000羽の伝書バトを飛ばし、359席を記者のために確保し、380人の地方警察官を配備した⁴⁷⁾。身体運動を目的とした各種連盟の入場行進、国際オリンピック競技大会のセレモニーを思わせる華やかな色の旗、ドイツ競技場の落成式ではオリンピック開催に先立って行進が行われた。その翌日の1913年6月9日にはDRAfOSの役員がベルリンにて会合し、1915年6月に第1回国内オリンピックをベルリンの競技場で開催することを確定した。そしてさらにその前座競技大会を1914年夏に開催を予定した。

この決定は個々の願いや提案だけに端を発したのではない。DRAfOSは国内オリンピックを開催するための様々なことを急ぎたてられていた。国家主義的なトゥルナーやスポーツの推進によって1913年2月のDKBを結成したことが大きな要因といえよう。

DKBはドイツ競技大会を主催することに力を注ぎ、その中に国際オリンピック競技大会ではないドイツの身体運動の頂点に位置づく国内オリンピックという意味を付したドイツ競技大会を求めていたからである。

7. 国内オリンピックとしてのドイツ競技大会

1912年9月オーバーホーフにて第1回スポーツ・身体運動科学研究会が開催されたさいにロルフス(RAの幹事長)は「国際オリンピックなのか国内オリンピックなのか」という講演を行った⁴⁸⁾。そして国際オリンピックをベルリンで開催されることを望む主張をした。また彼の要求はDRAfOSによるドイツ競技大会の開催であった。ロルフスはトゥルナーを擁護した。つまり、トゥルナーのストックホルム大会への参加拒否を擁護し、そして「他国の秩序」に対して祖国の信念を、また「記録追求主義」に基づく偏った競技者の育成に対してわが民族の身体のため健康のためにドイツ国内オリンピックを要求した⁴⁹⁾。イデオロギーのごとく親密な人事のつながりのあるドイツ愛国同盟(Deutscher Patriotenbund)はドイツ帝国創設50周年記念の1920年にライプツィヒの諸国民戦争記念碑において厳粛な祝祭を芸術や音楽、演劇それから身体運動とともに執り行われるべきであるとした。ロルフスは世紀転換以前から予定していた国民祝祭計画が再興されるはずであると指摘していた⁵⁰⁾。それゆえ、1種目の競技ではなく、ギリシア的な跳躍やレース、円盤投げ、砲丸投げ、槍投げ、ソフトボール投げ、レスリング、5種競技といったスポーツ的なプログラムが大変重要であった。

共通の祝祭計画は以前1897/98年にロルフスとシュミットらが構想した計画をほんのわずかながら削除しただけに等しかった。しかしながら、イデオロギーの埋め込みと攻撃的なまでの方向性が本質的なものを変えてしまった。つまり、ロルフスは今や競技大会の理念のなかに「欠陥のある民族」や「欠陥のある国防兵役者」に対して祖国を持たぬ仲間であるという志向性を持つ攻撃的な国家主義を支持した。健康的な民族の身体は兵役の衰弱や物質的な享楽、低い思考力に対して立ち向かわなければならず、「身体養育の育成」は民族の生存競争における能力のためにある⁵¹⁾とし、また、それによってドイツ帝国は勝負に強い兵士を再び存続させることができる⁵²⁾、とした。つまり、ロルフスにとっては国際オリンピック競技大会が求めているような最高成績による結果によってのみ、身体能力は決定されるものではないという視点をもっていた。

1913年2月ライプツィヒにおいてDKBが1920年ドイツ競技大会開催にむけて設立された。ロルフスはDTの恩恵を受けるためにDTの会長であるゲッツに同意を得ようと努めた⁵³⁾。またロルフスは以前のRAの旧友であるライトとシュミットそれからZAの会長であるシェンケンドルフと再びかわりを持つようになった⁵⁴⁾。

ドイツ競技大会開催地はドイツ愛国同盟のテーマによって約束されていた。諸国民戦争記念碑の前に約200万マルクの競技場を建設し、その資金もドイツ愛国同盟が用意した。最終的には、600万マルクの資金を投入した。1913年すばらしい記念碑のための建設ならびに落成式を確かなものにした。ロルフスは国内オリンピックの開催をDRAfOSの内部にも見据えていた。1913年7月DRAfOSの会合までに次の状況の評価を以下のように示している。

「RAの活動は1916年まで国際オリンピック競技大会の開催だけではなく、つまりDKBが実現しようとしたような祖国における競技大会の開催を包括した概念の養成に歩み寄らねばならない。」⁵⁵⁾

ロルフスはこの意味においてかならずしもDRAfOSの活動と対立していたわけではなかった。つまり、1908年国際オリンピック競技大会のひどい結果に対してドイツのもっとも優れた競技者の選抜を強く求めた。そしてそのかわりで1912年に最も優れた「民族の身体」をこの機会に示すためには、国際オリンピック競技大会に威厳を持ってドイツの代表を派遣することが前提条件となると考えていた⁵⁶⁾。

8. オリンピアの代用としての 祖国における競技大会

オリンピックの代用としての祖国における競技大会開催に至る経緯についてはDKBの創設と祖国のための奉獻式祭としてのドイツ国民祝祭の開催を再び開催するためのDRAfOSの会員によるマスコミ活動に由来している。第一次世界大戦のわずか数週間前にグリューネヴァルト競技場においてはじめて前座試合が開催された。戦争は1915年の国内オリンピック競技大会と妨げ、同様に1916年の国際オリンピック競技大会をも中止させた。戦時中の1915年にDRAfOSは特に、戦争行為に対する国際オリンピックの理念を維持するか1916年にベルリンで開催するかどうかについて引き続き決断をDTのグループとDKBの会員を通じて迫られた。最終的にDRAfOSは1916年2月10日、チームの出席をともなった競技大会会議において戦後の2年後に第1回ドイツ競技大会を導入することを決定した。そしてそれは4年毎ごとに開催されるとされた⁵⁷⁾。

1916年8月、DRAfOSの副会長であるロルフスはオェアツェンにDKBがDRAfOSの会員になり、そしてグリューネヴァルトにおいて計画されていた競技大会に関与するよう⁵⁸⁾を要請した。けれどもこの対等関係は、さらなる対応を如何に確保するのかという乗り越えがたいものであった⁵⁹⁾。1917年1月25日DRAfOSはドイツ身体運動帝国委員会と名を改めた。つまり、「オリンピック競技大会」という表示の断念を意味した。

「われわれが見据える限りにおいて、戦争は続くであろう。以前の国際オリンピック競技大会は一生涯不可能となった。われわれの国内オリンピック競技大会にドイツという名を維持する」⁶⁰⁾

よって1918年の会議による新しい規約§1は、

「繰り返される目的が4年ごとに発展するために祖国による競技大会の開催を通して身体運動の普及と完全なる実施を支援する。」⁶¹⁾

戦中の長い間の意見の衝突の後、1919年DKBは最終的にドイツ身体運動帝国委員会（以下DRAfLと表記）の中のドイツ競技大会委員会として共通の祖国のための競技大会の導入に向けて共同で作業することに譲歩した。1919年初年にはすでに1921年の競技大会計画が提出された。それは、「競技期間、メイン機関、冬期間」という3つの時期に区切って開催するというものであった。ゴルフ、ポロ、飛行機レース、自動車

レースに加え、歌唱コンクールも同様にプログラムに取り上げられた。もちろん、ドイツトゥルネンと民族スポーツ（Volksports）は大変重要であった。この競技大会は全ドイツ人に開かれた全国的な動きとして位置づいた。さらに、諸外国に住んでいるドイツ民族やドイツ的な身体運動を行っている諸連盟をも含んでいた。競技大会は1921年を予定したが、再び延期された実際には1922年7月ベルリンにおいて第1回ドイツ競技大会（Deutsche Kampfspiele）が開催され、DFBの選手権大会の決勝戦をともなって幕が落とされた。国内そして国外からのあらゆる専門種目の参加のもと、そして全ドイツ民族のもとドイツ・オリンピックとしてのドイツ競技大会は開催され、いわば1920年アントワープ・オリンピック競技大会への出場禁止措置に対する独自の1920年と24年の間に位置づく「中間オリンピック」として開催された。また、フランス領の一部となっていたラインラントとルール地方の解放後、第2回ドイツ競技大会がケルンにおいて達成された。特にドイツ国民のエネルギーのシンボルとなった。ケルン市の市長であったアーデナウアは歓迎の挨拶で次のように述べている。

「祝祭と同時にわが兄弟と故郷の分断という他国による占領の圧力からついに長い間のつらい苦しみから解放された。」⁶²⁾

すでに世紀転換期以前から国際オリンピック競技大会の理念に反フランス的などという意味含んでいたこれまでのヴェイッテ、シュミット、ライト、ロルフスらによる計画はようやく、第一次世界大戦後に統一機能をもってドイツ競技大会は開催されたのであった。

9. 結 論

本稿では国民祝祭としてのドイツ・オリンピック、すなわち、第1回ドイツ競技大会開催に至る経緯を「トゥルネン＝スポーツ抗争」という視点を軸に考察した。その結果、①国民祝祭と身体運動（トゥルネンおよびスポーツ）がはじめて結びついたのは各地で行われていたセダン祝祭であった。②全国規模の国民祝祭としてのドイツ・オリンピックはその開催をめぐる国内オリンピックなのかそれとも国際オリンピックなのかという議論がなされたが、結局第一次世界大戦前には一度も統一的な競技大会を開催することができなかった。③国民祝祭としてのドイツ・オリンピックの開催にはスポーツ推進派のゲブハルトとトゥルネン側との争いに加えて、ZAが重要な役割を担っていた。④国民祝祭としてのドイツ・オリンピックは第一次世界大戦後に第1回ドイツ競技大会として開催された。

以上の結果を踏まえるならば、国民祝祭としてのドイツ・オリンピックの開催に至る経緯を「トゥルネン＝スポーツ抗争」という視点でとらえると、従来までの「トゥルネン＝スポーツ抗争」の「トゥルネン／スポーツ」という二項対立の図式による歴史史観の克服という側面としてとらえることができるであろう。すなわち、両組織に影響を与えていた、シュミット、シェンケンドルフ、コッホらによって組織されたZAの相互関係を明らかにする必要がある。しかし、既に本稿の域をこえている。今後の課題としたい。

※本稿は平成20年度日本体育大学学術研究補助費による研究成果の一部である。

10. 注および文献

- 1) D. Düding, Organisierte gesellschaftlicher Nationalismus in Deutschland (1808–1847), Bedeutung und Funktion der Turner- und Sänger-vereine für die deutsche Nationalbewegung, München, 1984, S.58.
- 2) 主に以下の研究者を挙げることができる。G. L. Mosse, Derationalisierung der Massen, Campus Fachbuch, 1993; S. Goltermann, Körper der Nation, Habitusformierung und die Politik des Turnens 1860–1890, Gottingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1998; 成田十次郎, 『近代ドイツ・スポーツ史 III ドイツ体育連盟の発展』, 不昧堂出版, 2002; 松尾順一, 『近代ドイツにおけるドイツ体操祭に関する史的研究 (1860～1880) —ドイツ体操祭の国民統合的機能の分析を中心として—』, 日本体育大学博士論文, 2008.
- 3) アレン・グットマン, 谷川稔他訳, 『スポーツと帝国』, 昭和堂, 1997.
- 4) 「トゥルネン＝スポーツ抗争」に関する主な論文は以下の通りである。H. Bernett, Leichtathletik im geschichtlichen Wandel, Karl Hoffmann, Schorndorf, 1987; C. Eisenberg, Fußball, soccer, calcio, Ein englischer Sport auf seinem Weg um die Welt, München, 1997; H. Loose, Die geschichtliche Entwicklung der Leibesübungen in Deutschland, der Kampf zwischen Turnen und Sport, 1926; H. Becker, Für einen humanen Sport, Schorndorf, 1995; C. Diem, Friede zwischen Turnen und Sport, Leipzig/Berlin, 1914; W. Eichel, Die Körperkultur in Deutschland von 1917 bis 1945, Berlin, 1969; C. Diem, Weltgeschichte des Sports, Bd.2, Stuttgart, 1971; M. Krüger, Einführung in die Geschichte der Leibesübung und des Sport, Teil 2: Leibesübungen im 19. Jahrhundert, Turnen für Vaterland. Schorndorf, 2005; 成田十次郎, 『近代ドイツ・スポーツ史 III ドイツ体育連盟の発展』, 不昧堂出版, 2002.
- 5) 一般に普仏戦争と呼ばれている戦争は、正しくは(北ドイツ連邦のみならず南ドイツをもふくむ)ドイツとフランスの戦争なのである。マイン川の南北で裂け目が生じることを期待していたフランスの思惑に反して燃え上がった反仏ナショナリズムを「かすがい」にして南北の軍隊は一体となってフランスと戦った。またフランス主力軍が退却したベルギー国境付近のセダンでも、ドイツ軍は9月1日から2日にかけて決戦をいどみ、フランス側はナポレオン三世みずから8万3千の兵士とともに捕虜となるという完敗を喫したのである。その結果、フランスはアルザス-ロレーヌの大部分を割譲、償金50億フランを支払った。また、プロイセン王ヴィルヘルム一世がベルサイユ宮殿の鏡の間においてドイツ皇帝に即位し、これによってドイツ第二帝政が創設された。末川清「帝国創建の時代」, 成瀬治他編著『世界教育史大系 ドイツ史2—1648年～1890年—』, 山川出版, 1996, pp. 339–394.
- 6) G. von Bodelschwingh, Friedrich von Bodelschwingh, Bethel 1922, 1949, S.307.
- 7) Georg Müller, Friedrich von Bodelschwingh und das Sedanfest, in: Geschichte in Wissenschaft und Unterricht, 14. Bd., 1963, S.85.
- 8) Ebenda, S.83.
- 9) Vgl., F. Schellack, “Sedan- und Kaisergeburtstagsfeste”, in: D. Düding, u.a. (Hrsg.), Öffentliche Festkultur. Politische Feste in Deutschland von der Aufklärung bis zum Ersten Weltkrieg, Reinbek, 1988, S.278–297.
- 10) Vgl., R. Naul, “Gymnastics, Athletics, Games’: Sedan Celebrations in Imperial Germany”, In: Stadion 12/13 (1986/87), S.131–136.
- 11) アウグスト・ヘルマン (August Hermann: 1835–1906) ブラオンシュヴァイク・トゥルネン協会主任。主に女性トゥルネン部門に従事していた。また、1869年からブラオンシュヴァイク地方、マルチノ・カタリニウム学校に着任し、K・コッホとともに初期の遊戯運動の促進に貢献した。とりわけ、ドイツにイギリスのフットボールを普及させた先駆者であった。Vgl., H. Ueberhorst, Geschichte der Leibesübungen Bd.3/1., Berlin, 1980, S.424ff.
- 12) E. U. Hamer, Die Anfänge der „Spielbewegung“ in Deutschland, London, 1989, S.590.
- 13) Vgl., E. Witte, Wie sind die Öffentlichen Feste des deutschen Volkes zeitgemäß zu reformieren und zu wahren Volksfesten zu gestalten? Leipzig, 1896, S.21.
- 14) Ebenda, S.22.
- 15) 「ドイツ民族・青少年遊戯促進中央委員会 Der Zentralausschuß zur Förderung der Volks- und Jugendspiele in Deutschland」(1891–1922) ZAはDTのような大規模な協会組織の連合体ではなく、少人数(結成時に36名)の教育関係者や政治家、体育会の指導的人物たちによって構成されており、ドイツ国民や政府当局に対して国民的身体教育の更なる拡充の必要性をアピールし、「教育による国防力 Wehrkraft durch Erziehung」の強化を実現することを目的としていた。Vgl., Ebenda, H. Ueberhorst, S.424ff.
- 16) フェルディナンド・アウグスト・シュミット (F. A. Schmidt: 1852–1929) ボン大学医学部教授。ドイツトゥルネン連盟の指導部であり、またZA推進者でもあった。Vgl., K. Lennarz, Geschichte des Deut-

- schen Reichsausschusses für Olympischen Spiele, Heft 1, Bonn, 1981.
- 17) Vgl., Ebenda, K. Lennartz, 1981, S.54f.
 - 18) 1895年6月12日付のフランスの「ジル・ブラス Gil Blas」紙に掲載されたクーベルタンのインタビュー記事。その記事は「非常遅れてから—おそらく故意に—招待されたドイツだけがこの会議に参加することを拒否した。この不参加は話題にはあがったが、しかし、誰の不満も呼び起こすことはなかった」と報じた。この記事はドイツ側のみならず第1回大会準備委員会のあいだにも波紋をよび、クーベルタンは同紙に掲載されたインタビュー内容の取り消し声明をおこなっているが、体育史上「ジル・ブラス事件 Gil-Blas-Affäre」といわれるその後の騒動を止めることができなかった。Vgl., Ebenda, K. Lennartz, 1981, S.63–68.
 - 19) Vgl., F. A. Schmidt, “Die Wiederbelegung der olympischen Spiele nebst zeitgemäßen Betrachtung über Turnen und Sport”, in: Deutsche Turn-Zeitung 43 (1895), S.937–939, S.961–965, S.985–988, S.1009–1012.
 - 20) 前掲書, 成田, 2002, p.266.
 - 21) 前掲書, 成田, 2002, p.268.
 - 22) Vgl., S. Below/F. Neumann, “Dr. Willibald Gebhard und die ‘Allgemeineausstellung für Sport, Spiel, und Turnen’ 1895 in Berlin”, in: Theorie und Praxis der Körperkultur 39, 1990, S.200–204.
 - 23) このことは後にシェンケンドルフがDTを離れてより遊戯およびスポーツ活動を推進していくことを裏付けていると言えよう。
 - 24) Vgl., Ebenda, K. Lennartz, 1981, S.55 u.72.
 - 25) W. Gebhard, Soll Deutschland sich an den Olympischen Spielen Beteiligen?, Berlin, 1896, S.93.
 - 26) ドイツ皇帝による「国内オリンピックの成功のためには各種スポーツ連盟ならびにDTとの協力関係が必要である」という指摘を受けて、ZA会議（ミュンヘン）、DT委員会会議（ケルン）、ZA会議（カッセル）が開かれるが、進展はなかった。Vgl., K. Lennartz, 1981, S.58ff.
 - 27) H. Rühl, “Das Nationalfest und die Deutsche Turnerschaft”, in: Deutsche Turn-Zeitung 44 (1899), S.47.
 - 28) Vgl., W. Böckmann/B. Schmitz, die Deutschen nationalfeste und Kyffhäuser als Feststätte, Berlin, 1897, S.9.
 - 29) Vgl., R. Naul, Das deutsche Nationalfest. Vortragsmanuskript, dvs-Sektion Sportgeschichte, Koblenz, 1989.
 - 30) W. Rolfs, Deutsche Nationalfeste. Auskunftsbüchlein für Jedermann, der sich darüber unterrichten will, München/Leipzig, 1898, S.48–49.
 - 31) C. Diem, Deutsche Kampfspiele 1922, Berlin, 1922.
 - 32) Vgl., R. Naul, “The Rise and Fall of the German National Olympic Games”, in: L. Zecevic, (Hrsg.), ICOSH Seminar 1988. The Olympic Movement, “Past, Present and Future”, Sarajevo, 1989, S.226.
 - 33) DRAfOS, Entwurf der Satzung, Berlin, 1904, Carl und Lieselott Diem-Archiv, Köln.
 - 34) R. Gasch, “Olympia und Frankfurt”, in: Deutsche Turn-Zeitung 53 (1908), S.231.
 - 35) Ebenda.
 - 36) Gasch, “Olympia und Frankfurt”, S.230.
 - 37) Ebenda.
 - 38) Ebenda.
 - 39) Vgl., “Zweites Deutsches Olympia”, in: Körperkultur 5 (1910), S.336.
 - 40) Vgl., M. G., “Sportliche Übersicht”, in: Körperkultur 4 (1909), S.213.
 - 41) Vgl., Akademischer Sportbund, “Drittes Akademisches Olympia”, in: Körperkultur 5 (1910), S.337.
 - 42) Vgl., “Hinweis der Deutschen Sportbehörde für Athletik an ihre Vereine”, in: Deutsche Turn-Zeitung 58 (1913), S.50.
 - 43) Vgl., Naul, Das deutsche Nationalfest.
 - 44) DRAfOS, Aufruf zur Beteiligung am Bau eines deutschen Stadions, Berlin, 1908, S.3.
 - 45) DRAfOS, Aufruf, S.1–2.
 - 46) ドイツ帝国議会議員（のちにドイツ帝国郵政大臣（1897–1901）、プロイセン農務大臣（1901–1906）を歴任）V・A・T・v・ポドビエルスキー（V・A・T・v・Podbielski）はスポーツ文化の振興に積極的に携わっていた。Vgl., Carl Diem Institut, Dokumente zur Frühgeschichte der olympischen Spiele, Köln, 1970.
 - 47) H. Schröder, “Stadion-Weihe in Berlin”, in: Monatschrift für das Turnwesen 32 (1913), S.241.
 - 48) Vgl., W. Rolfs, “International oder nationale Olympien?” in: Deutsche Turn-Zeitung 58 (1913), S.229ff. u. 349ff.
 - 49) ロルフスはオーバーホーフにおいて1912年のはじめに書かれた1920年のドイツ競技大会に関する文書を報告した。
 - 50) Vgl., W. Rolfs, Deutsche Kampfspiele 1920. Werbeblätter für vaterländische Gedenkweihen, München, 1912, S.42.
 - 51) Vgl., Ebenda, W. Rolfs, 1912, S.37.
 - 52) Vgl., Ebenda, W. Rolfs, 1912, S.23.
 - 53) Vgl., Deutscher Kampfspiel-Bund, Werbeblätter für vaterländische Gedenkweihen, (1913), Nr.1, S.13.
 - 54) Vgl., Ebenda.
 - 55) Vgl., Ebenda, S.25.
 - 56) Vgl., Ebenda.
 - 57) Vgl., DRAfOS, Stadion-Kalender 3, 4, 5 (1917) 1, S.4.
 - 58) Vgl., Ebenda, S.12f.
 - 59) Vgl., Ebenda, S.13-17.
 - 60) Vgl., DRAfOS, Stadion-Kalender 3, 4, 5 (1917) 2, S.31.
 - 61) DRAfOS, Entwurf der Grundsätze unserer Organisation, Berlin, 1918, S.1.
 - 62) Pressestelle der Deutschen Kampfspiele (Hrsg.), Festbuch der Deutschen Kampfspiele, Köln am Rhein, 4.-11. Juli 1926, Köln, 1926, S.6.

〈連絡先〉

著者名：波多腰克晃
 住 所：東京都世田谷区深沢7-1-1
 所 属：日本体育大学体育原理研究室
 E-mail アドレス：hatakoshi@nittai.ac.jp